

---

# 哀闇アーマー

眼が灰猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

哀闇アーマー

### 【Nコード】

N0199Y

### 【作者名】

眼が灰猫

### 【あらすじ】

高校二年の夏休み。

俺は殺されかけた。

命の恩人の手により、なんとか一命を取り留めた。

命を救う対価で――体を捨てた。

俺を襲った『オニ』とは？

オニの住む世界とは？

想像を絶する世界に、俺は足を踏み入れていく……………

はじめまして。眼が灰猫と申します。

勢いで書き始め、そのまま投稿してしまいました。

小説を書くのは初めてですが、完結させることを目標に頑張ります。

冷たい目でもいいので、とりあえず見てやってください。

よろしくお願いします！

## 第一話（前書き）

はじめまして。眼が灰猫です。

数ある作品の中から、私の作品を目に留めていただき、誠にありがとうございます。

では、存分にかっかりしてください。

## 第一話

大変なことが起きた。

俺は今、目の前にいる見知らぬ人から死亡宣告をされた。

- お前はもう、死んでいる、と。

いや、そんな世紀末なオーラは出ていなかったし、何よりそれを言い放った人は女性だった。

ほたるひもち  
蛍火桃子 - 頭を左に傾けて赤い髪を揺らし、彼女は名乗った。

体つきや雰囲気からの推測だが、俺より年上に見える。少なくとも高校生ではないだろう。

まあ、有り体に言ってしまうえば、美人だった。

……それはともかく、俺は当然のごとく目を逸らして逃げようした - が、ここが室内であることに気付く。

それもまた、見知らぬ場所だった。

どうやらアパートの一室らしいが。

とにかく状況を整理しようにも、整理のしようがない。

目が覚めたら、俺は知らない部屋にいて、謎の女性から意味不明なことを言われた。

これが事実で、これ以上でも以下でもないのだろう。

「……………」

蛍火さんは相変わらず顔を左側に傾げ、視線はまっすぐに俺を捉えていた。

いい加減帰りたいなあ……。

すると突然、蛍火さんは何か思いついたようで、

「あつ……見てくれば？」

「何をですか？」

「見てくれを、よ」

今のは果たしてギャグだったのだろうか、と悶々としながら数歩で洗面所を見つけ、たどり着く。

「え……………」

正直、あなたは幽霊になって鏡に映りません的なオチが待っているのだと思っていた……まあ、そんな結末だったら、それはそれで困るが。

寝起きの思考は恐ろしい……。

さて、冒頭を『大変なことが起きた』で始めてしまった俺だが、

あれは取り消そうと思う。

あの時点では別段大変なことなど起きていなかったからだ。

そして改めて。

- - 大変なことが起きた。

はつきりと目が覚めてしまった。

夢ならよかったのに - - 今更ながら思う。

何が起きたのかと言うと、俺が鏡に映っていなかった。

代わりに、髪は茶色 - - いや、オレンジ色で、鋭い瞳は黄土色。  
総括して、チャライ - - そんな風貌の男が映っていて。

「……どういことですか」

いつの間にか背後にいた蛍火さんに、訊く。

「難しいと思うけれど、頑張って落ち着いて」

そんなことを言われるまでもなく、こんな状況のわりに - - どんな状況かわからないわりに - - 俺には妙な落ち着きがあった。

「あなたは、化け物 - - 私は『オニ』と呼んでいるわ - - に襲われたの。」

そしてあなたを見つけたときには、もう虫の息だった。

このままでは助からない。そう思って私は、あなたの魂を抜いて、その体に入れたの。

方法は秘密よ――というか、私自身がよくわかっていないから、説明しろと言われても困るわ」

……は。

驚きを感じる神経が麻痺しているのか、俺は螢火さんの言葉をすんなり受け入れた。

前頭葉だの小脳だのがストライキでも起こしたのだろう。脳が働くのを止めた、とも言えた。

改めて、鏡に映る自分を見つめる。

どうやら特殊メイクでも、頭から爪先までの全身移植でもなさそうだった。むしろそっちの方が、まだ現実味があった。

生身。人肌。

正真正銘、人間のそれだった。

「そうね、今後のことだけれど――私は、あなたを元の体に戻す努力をするわ」

「……戻れるんですか？」

全く覚えてないけど、今までの会話の感じで、俺の体はもうボロボロのグチャグチャなんだとばかり思っていた。



「かろうじて生きてるはずよ。魂がこうして生きてる限りは。」

最も、私があなたの魂を抜かなければ、どうなっていたかはわからないけれど」

「あつ、その・・・その節は本当にありがとうございました」

身に覚えはないけれど。

厳密には、覚えている身がないけれど。

「見ず知らずの俺なんかを助けてくださって……」

「ん？ あら、そんな風に聞こえちゃったかしら。

別にいいわよ、感謝なんてしなくて。それより……」

鏡越しに、蛍火さんが目を伏せたのが見えた。

「・・・私が困ったときは、助けてね」

こうして俺の夏休みは、始まる。

\* \* \* \* \*

散歩でもしてくれば、と俺は蛍火さんに半ば追い出されるような形で外に出た。

真夏だけあって、もう六時過ぎだというのに外で将棋ができるくらいに明るかった。

名前は知らない、田舎町。

目の前に広がる、田んぼや畑。

……俺の前には、問題の山。

俺はこれからどうすればいいんだろう。元の生活に戻るのか？  
この体は誰なんだ？ そして……オニって、何？

脳内で迷子だ。

頭が痛いなあ。

比喩じゃなくて。

「……うっ」

地面が近い。

まさか、頭痛でしゃがみこむとは。

「大丈夫ですかキキ殿！」

声の主……クリーム色の髪が特徴的な十歳くらいの少女が、ポニテールを揺らして駆け寄ってきた。

「キキ殿、立てますか」

キキ殿とは当然、俺のことだ。

いや、当然ではない。そんな風な呼ばれ方は初めてされたのだが、この少女は当たり前のようにそう呼ぶのだ。

誰かと勘違いしているのではなく、どうやら萤火さんが名付け親だと判明した。

由来は俺の名字である林を、『木』と『木』にして『キキ』……だそうだ。

安直と言うか、上手くもないし……うーん、微妙だ。

まあ、萤火さんにはかなりの恩があるわけだし、どう呼ばれようが文句は言えない。

「心配してくれてありがとね。大丈夫。ちょっとフラッとしただけだから。」

いろりちゃんは優しいんだね」

何か気に障ることでも言ってしまったか、いろりちゃんは俺の言葉に顔をしかめた。

「キキ殿……いろりの外見がこうだからって、そんな歌のお兄さんみたいな言葉遣いをしてもらわなくて結構です」

いろり。

蛍火さんの『手伝い』をしているらしい――オニである。

全ての事情を把握できたわけではないが、俺の日常を奪った主犯であろう――オニ。

一見して、二度見をしても、人との明確な違いがわからない。クリーム色の髪が判断材料になるかと言えば、そんなことはない。染めた子だっているだろうし、その判断基準では、頭がオレンジの俺もオニに分類されてしまう。

「ところで、いろりちゃんは、その――オニ、なんだよね？」

言って気分のいい言葉ではないだけに、つつい歯切れが悪くなってしまう。

「はい。いろりは、桃子殿の言うところの『オニ』です」

「じゃあ……きみも俺を殺すの？」

「の？」

俺の問いかけに、いろりちゃんはキョトンとした。

そういえば蛍火さんも同じように首を傾げていたけど、なんかこう、味わいが違うよねあ。

それにしても「え？」とか「ん？」とかのノリで、「の？」を使う人を初めて見た。

「いえいえ。ですから、いろりは桃子殿のお手伝いをしているのです。」

せつかく桃子殿があなたを助けたのに、どうしてまた殺すのですか」

「じゃあ何で俺は……」

殺されたのか……と言い終わるより早く、いろりは答えた。

「干渉したからですよ」

「干渉？」

「ここで言う干渉とは、オニを視認することです」

「視認？ 見ただけで殺されるのか？」

ヤンキーだってそんな真似しないぞ。

「視認だけに、死人にされてしまうのです」

「色んな意味で笑えない……」

なんだこの子。

「この辺りも桃子殿に説明されているはずなのですが……されてないですね。」

長くなるかもしれませんが、ちょっと歩きましょうか」

\* \* \* \* \*

「なるほどね」

今聞いた話を簡単にまとめると、

「待ってください。キキ殿」

「何？」

「しばらく流し読み推奨です。どうぞ、じゃんじゃかと流してください」

「一気にモチベーション削がれた……」

「ここはどーんと50ページくらい流すとかどうですか？

そうですね、いろりとキキ殿が結ばれるあたりまで飛ばしてみます？」

「お前がメインヒロインだったのか!？」

嘘つけ。……嘘だよな？

「ただしいケメンに限る」

「……………」

もつと話の流れを大切にしてくれ。

急流過ぎて俺まで置いてけぼりだ。

「ただし川や海に流さないでください！ 自然を大切に！」

「まだやるの!？」

もういいだろ！

まあ、流し読み警告をするならば、もう少し早い段階でしておくべきだった気がしなくもない。

閑話休題。

普通、人はオニが見えない（反対にオニは人を見ることができる）。

オニは、こことは違う世界に住んでいる。

人と関わることをしない。本来有り得ないが、もし俺のようにオニを見える人がいた場合、その人を殺すことで人間界とオニの世界との秩序を保っているとか。

「そして、オニ使いは互いに引かれ合う。オニ使いにしかオニは見えない、と」

「それはキキ殿の妄想です。そもそもなんですかオニ使いって！ 何パクってるのですか」

「う、ごめんなさい」

怒られてしまった……。

俺の前を歩く少女は、なぜかそういう面で厳しい。

「それと、オニとは簡単に言えば人の感情の塊……って、いまいちわからないんだけど」

たとえば、神を信仰し、神はいると思った心が具現化したもの。つまり、神そのものではない……と言われましても。

ちなみに、さっき接し方を注意されたので、呼称、子供扱いを若干ながら修正しておいた。

「そもそも元々、神とかつて、信仰心こそが、それ自体が神じゃないの？」

宗教に疎い俺は、その段階から悩んでしまう。

「さあ……いろいろ達は神や仏や妖怪変化をかたどった存在に過ぎませんから。その疑問には答えられません。むしろキキ殿同様、考える側ですかね。」

いろいろ達は人より上位のものでもないのです。比べようもありません。違うのですから。

異世界人とみなした方がいいかもしれません。いろいろ達の世界にだって、天国地獄より、異世界です。もっと言えば、超常現象、



魑魅魍魎共のテーマパークでしょうか」

違うのですから。

住む世界から、常識から、何から何まで――次元まで。

次元が違う。

俺は果たして、何の相手をしているのだろうか――ふと我に返るのが、辛い。

気を取り直して、強く持ち直して、質問を続けた。

「そういえば、どうやって蛍火さんと知り合ったの？ 普通は見えないんだろ？」

俺のように普通じゃない場合以外に、蛍火さんというりのように『契約』（詳しくは知らない）したオニならば見ることができるらしい。

「桃子殿は……たしか知人の紹介ですね」

「じゃあ、その知人とは？」

「たしか、出会い系だったような」

「で？ どうやって？」

「スルーですかキキ殿……」

そりゃあスルーだろ。

「実は気合い系で、です」

「どこソレ知らない……」

誤魔化すってレベルじゃないぞ。

「まあ、そこまで話したくないならいいけど。」

あと気になっただけど、いろりって他人には見えないんだろ？  
……てことは他人から見ると俺は今、独りで会話している痛い奴  
みたいになっちゃってるのか。うわぁ。……うわぁ」

「よいではないですか。昨今流行りの、エア友達ってことにしてお  
けば。万事解決なのです」

「それはそれで問題が生じる……」

万事休すだよ……。

「たしかに痛いのはその見た目だけで十分って感じですよね」

傷ついた！　ざっくり刺さった！

「で、でもこの体、俺のじゃないし」

「そうでしたね。キキ殿の本体は、痛いならぬ遺体になったのでし  
た」

「……蛍火さんは死んでないって言ってたもん」

「冗談です。魂がなくては、それ以上死にようがありませんからね」  
そういう理屈か。

たしかに、俺の体のままで生きられるなら、わざわざ体を替えた  
りしない。

……いや、滅茶苦茶だが、妙に納得させられてしまった。

「……さて、着きましたよ」

気が付くと小さな神社の前にいた。

話しながら、ずいぶん歩いたようだ。

「着いた、って……ここがどうかしたのか？」

「こちらです」

「……岩？」

社の横にある、一メートル程度の岩。

「この岩が、向こうの世界に繋がっているのです。

キキ殿。少し離れていてください」

最初から近づいてなどいなかったが、いろりの言葉で、また少し

後ずさる。

「このくらいでいいかな？ ……っ！」

自分の・・・と言っているものが怪しいところだが・・・目を疑った。

「何、やってんの？」

そう言ってみたものの、大方見当は付いている。

いろりは見ると同時に儀式めいたことをしていた。

ほどなくして、ゲームとかでお馴染みの、まばゆい光を放つ魔法陣らしきものが出来上がった。

その中心で、いろりは俺を向いた。

「やはり何事も習うより慣れろ、なのですよ」

「習いたいとも慣れたいとも言っていないけど……」

「行きましょう・・・オニの世界へ」

## 第一話（後書き）

よくぞここまでたどり着きました。きっとあなたの忍耐力強化に繋がったと思います。

これからの展開が気にならんでもない、という方がいらっしゃるかもしれません、これからもよろしくお願いします。

ちなみに、タイトルは『アイアンアーマー』と読みます。いい案があったらいつでも替えたいです。

## 第二話

全身を包む光から解放されると、そこは――

「ど」……？」

「ここは冥府めいふです。あちらとこちらを繋いでいる場所です」

見渡してみると、やけに狭い部屋だった。筒状で、部屋というよりエレベーターに近い。

「エレベーター！ 冴えてますね。キキ殿」

いろりが隣で嬉しそうに笑うと、地面が動き出した――それこそ、エレベーターのように。

どうやら、この筒は下降しているようだ。

やがて動きが止まり、前が開けた――。

まず、空の色がおかしい。

なんてったって虹色だ。

それも雨の日にたまに見られる、水とガソリンを混ぜた、あんな感じの。歪んだ淀んだ虹色だ。

さらに眼前には、市場を上品に仕立て、赤で塗りつぶしたような街並みが広がっていた。

何より一際目立つのは大きな城（城かな？）だ。

西洋風のそれは、例に洩れず赤く塗りたくられており、その頂上には金の獣の像が鯨じやうけいよろしく、厳然と構えている。

.....。

ファンシーが過ぎるわ。

それは何も、建物や景色に限った話ではない。

そこを行き来する者達・・・オニだ。

そこにいる誰も彼もが異質だった。

人型や、いわゆる獣人みたいな出で立ちの者が多いが、中には本当にモンスターな奴までいた。

「どうしました？　行きますよ」

俺がキョロキョロしている間に、いろりは入国の手続きを済ませて歩き出していた。

「ああ。ごめん」

こんな所ではぐれでもしたら、迷子確定だ。

運よく迷子センター的な場所にたどり着けたとしても、その後、外見年齢十歳ちよつとの女の子に迎えに来てもらうという、惨め過

ぎる光景と直面することになってしまっ

……それは嫌だっ！

「夢、じゃないよな……」

「勿論です……ここは永都<sup>えいと</sup>と言います。

そして中央、まっすぐに見えますのが煉府<sup>れんぷ</sup>の本拠なのです」

「煉府って？」

「煉府とは、そちらの世界で言う軍、いえ、ギルドですね」

「ギルドって……」

まあ、わかりやすかったけれども。

「最近では民間の依頼を承ることの方が多いので、どちらかと言うと、やはりギルド寄りなのです」

どうやら街はナント力都、施設がナント力府、と区別があるみたいだ。

「ご明察です。それにしても目の付けどころが違いますねキキ殿！  
まったく、どこに目が付いていられるのでしょうか。あっぱれです」

後半、誉められてる感じがしない……。



\* \* \* \* \*

煉府本部。

近づいてみて、改めてその大きさに息を呑む。

……て言うか、ここまで立派である必要はないだろう。まあ、反勢力でもいるなら別だが。

まあ、それはつまり煉府の力が大きいから、とも言えるわけだが、それにしたって、これは流石にやり過ぎではなからうか。

おまけにセンスが……いや、もう止めておこう。

「ではキキ殿。ここで一旦解散です。いろりは少々、やることがあるので」

「何か依頼するの?」

「いいえ。ちょっと、です。」

その間、色々見学でもしていてください」

「えっ、でも……まあ、いいか」

では後ほど。と、いろりは雑踏の中に紛れていった。

さて、どうするか。

金もないしな。適当に歩いて、適当にここに戻って来よう。そもそも、俺は散歩の途中だったわけだし。

いかに入り口までもが城に見合って巨大だとはいえ、出入りの多いこの場所に、いつまでも立ち止まっているわけにもいかないし――

「何故ここにいる」

「！……あ」

低く、濁った声。

突然目の前に黒い物が降りてきた。

男の人――いや、オニだった。

「……、では、どうやってこちらへ来た」

急なことで反応が遅れたが、どうやら俺に質問（尋問？）しているみたいだ。

周りの視線が集まる――でも、なんで俺だけ？

まさか――オニと人って簡単に見分けられて――人がいるのは、規則に反する？

だとしたら迷子センターどころの騒ぎじゃない！

「ここでは目立つ。……、来い」

……の割には、待遇が優しい。

とにかく、行ってみるしかないか。

中央の長いカウンター（煉府に何か頼む時に使うのだろう）の奥、  
四方が本棚に囲まれた書類ばかりの部屋へ通された。

例のオニは、机の上に散らばった紙をまとめながら、座ってくれ、  
と俺を促す。

その外見は、艶のある黒々とした髪。血色のよくない顔に、月を  
思わせる瞳。黄色いマスクのような物をしていた。

やっぱり人間との違いが明確にわからない。

確かに妙な格好ではあった。極めつけは、背中に生えた、髪と同  
色の翼だ。

ただ、それだけであって。

ただそれだけであって、その他の他は――雰囲気や立ち振る舞いは  
――自分達と何ら変わりはなかった。

勿論それは、いろりにも言えることだ。

何故だが、オニという言葉に差別的な響きを感じる。

まあ、そのオニに俺は殺されたらしいけど。

「最近、白鳥しろとりという男に会ったか」

一通り整理を終えた男は、机を挟んで俺の正面の椅子に座った。  
そうかと思ったら、この問いである。

「？ 会っていないと思います」

「……、そうか。いや、忘れてくれ。」

名前を訊いてなかったな。……、俺はサラクだ」

「あ、僕は…… キキです」

うつわ恥ずかしつ。

キキって。キキって何。

「キキ？ そうか。キキか」

自分で名乗っておいてアレだが、できれば連呼しないで頂きたい。

「では、改めて訊く。別に咎めるつもりはないが――」

どうやって来た、と。

おそらくサラクさんは煉府の、それもかなり偉い人だ。

つまりこの建物内で、もっと言えばこの街の中で、信用できる人の上位にいることは間違いない――そう思った。

まあ、そもそも才二を――偉ければ偉いほど――信じていいのかという、根本的な部分が説明されていないままだが。

「いろり……ある人に、連れて来てもらいました」

白状した。

「いろり？……、なるほど。数奇なものだな」

よくわからないが、サラクさんはどこか納得したようだった。

「萤火と縁があるのか」

「萤火さんをご存じなんですか」

「ああ。」

……、今日行くのか」

「どちらに、ですか？」

すると今度は、サラクさんが不思議がる番だった。

「？何か目的があつて来たのではないのか」

目的？

――何かある。

サラクさんが知っていて、俺が知らない――俺が知るべき何かが。

「何か、知ってるんですね」

「……、ああ。話してやりたいが、俺は今から出かけなければなら  
ない。……、だが、俺が話さなくても、いずれ知るだろう」

どうやらここらで、お開きのようだ。

「……、これを持っていけ」

帰ろうと椅子を立った俺に、サラクさんが授けてくれた物は――

「……鎖？」

であった。

「いつか役に立つだろう。それと――入ってきたらどうだ」

サラクさんが扉を睨むと、なんと勢いよく開いたではないか！

……いや、ただ外から思い切り開けられたただけだが。

「あ、お話し中だった？ スミマセンね」

部屋に飛び込んできた女性は、サラクさんの部下……にはどうにも  
も見えない。

「……、ヤナギ。立ち聞きか」

短い髪が嘘のように、詐欺みたいに白い、俺と同年代くらいのこの人は、ヤナギというらしい。

「だあから反省してますって。ホントに。それよりサラクさん……出たらしいですよ、奴」

「わかった。……、ヤナギ。行ってきたくれ」

「冗談よしてくださいよ。アタシだけで？ 買い被り過ぎてませんか？ それとも、まだ怪我が治ってないんですか？」

「俺は急ぎの用ができた。それにお前一人でも十分だろう」

「アハハッ。ま、そりゃあね。」

あまのじゃく  
天邪鬼持って帰ればいいんですよね？」

「ああ。では頼んだぞ」

そう言って、サラクさんは俺の前に現れたときと同じように姿を消した。

「どうする？」

場外で二人のやり取りを眺めていた俺に、不意にヤナギさんが話しかけてきた。

「何がですか？」

俺の問いにヤナギさんは、遊びに行こうぜと誘う少年のような笑

みを浮かべた。

「……だからさ、アタシと一緒に、天邪鬼捕まえに行っちゃおう？」

\* \* \* \* \*

どうしてこうなった。

俺達は冥府を経由し、葬土<sup>そうど</sup>なる森に来た。

普通の森と違う点は、歩くと足が水浸しになる。

地面にあたる部分が浅い川で、そこから当然のように木々が生えていた。

わさびの栽培を見たことがあるだろうか。あんな感じだと思ってもらえばいい。

少し歩くと、高低差十メートル、直径二十メートルほどの窪地が見えた。まるでクレーターである。

勿論、水は高い所から滝のように流れていたが、どういうわけか、そのクレーターは水でいっぱいになることはなかった。

「んじゃ、その辺で見ててよ」

ヤナギさんは言うと、自ら飛び降りていった。



俺も続いて降りようとしたが、彼女以外にすでにステージにオニが見え、足を止めた。

軽く見積もってヤナギさんの三倍はある。

あれが - 天邪鬼。

ヤナギさんは、どこから黄金色の双剣を取り出し、両手に持って走り出した。

「速いつ……！」

あっと言う間に敵の懷に潜り込み - 斬り裂く！

だが意外にも、剣先がわずかに掠っただけであった。

一旦距離を置く。

すると今度は、天邪鬼は両手にそれぞれ弓を構え（凄い形の手だ……もはや、あれは手なのか？）、肝心の矢だが、いかにもファンタジーな異世界らしく、謎の光る物質で創られているようだった。

そして、俺のターンだと言わんばかりの猛攻撃を仕掛けてきた。

乱射だ。一見すると当てずっぱうの数打ちや当たる戦法のように思えるのだが。

違う。

そのほとんどが、動き回るヤナギさんを捉えていた。

と言っても、ヤナギさんはノーダメージだ。彼女は彼女でそれらを剣で弾いていた。

矢に追尾性能は見られない。

なら、何故ここまでの命中率を誇る・・・？

「……………」

今思えば、ヤナギさんの一撃を避けた時も、どこか違和感があった。

見かけによらず、あそこまでの身体能力を有するとは。

「・・・キキ！」

「！　うわっ！」

結果として、ヤナギさんの声は間に合わなかった。彼女を貫くことに失敗した一閃が、俺の横に突き刺さり、地面を吹き飛ばしたのだ。

戦場に落ちていく俺。

ヤナギさんの邪魔はしたくないし、何より・・・何より俺がやられる！

今日だけでそうそう何度も死んでたまるかつ。

俺は心の中で叫び、一心不乱に左手を――鎖を天へ伸ばす。

すると――

「！ 届いたっ」

まさかのまさか。鎖の先端は木まで届き、ぐるぐると巻かれ、俺は空中で止まった。

「アハハッ！ 大丈夫そうだね」

とても、矢の雨をかくぐっている最中の人の台詞とは思えない、そんな呑気な言葉を掛けられた。

そればかりか、笑いながら俺の方を見やる余裕さえある。

「……いや、見なくていいから！ 戦いに集中してください！」

勿論俺にしても他人の心配ばかりしている暇もなく――おそらくヤナギさんは心配いらない――急いで鎖をよじ登る。

それにしても、よくも上手く木に巻きつけられたものだ。

何だろう。サラクさんは、実は俺にこんな才能があることを知っていて、これを渡してくれたのだろうか。

いやいやいやいや。

突っ込み所が多いよ。

俺は鎖使いとかではないし、仮にそうだとしてもサラクさんがそれを  
知るはずがない。

俺は必死に鎖を投げたとは言っても、決して木まで届くような力  
ではなかった。

そして何より、この鎖の長さなんて、せいぜい二メートルがいい  
ところだ。

ところが、だ。

十メートルはあろうかという崖の後半――もう木より地面の方が  
近かった――まで落ちていたところからのアクションだったにも関  
わらず。

それでも間に合った。

地球上のあらゆるナント力学を、全て無視している。

……あつ、ここ地球じゃないのか？

結論が出た。

この鎖は凄い。

試しに狭い木々の間を通してみたり、遠くの葉を狙ってみたりし  
た。

触手のように、手足のように、とはいかないまでも――手に取る  
ように動かせる。

鎖使いのキキの誕生だっ。

.....。

ヤナギさんは大丈夫だろうか。

見た感じは無傷だ。

しかし、だからと言って優勢かと言えばそうでもなく、天邪鬼の方も、ヤナギさんの先制攻撃以降も攻められている場面はあったものの、致命傷になるほどの決定打は受けていないようだ。

長期戦になれば、彼女の体力が心配である。

そのヤナギさんが、

「.....飽きた」

と、呟いた。

呟いて、空中に何やら輝く難解な図形を創っていく。

いろりが見せた、魔法陣的な物の仲間だろう。

対する天邪鬼も、山びこのように、真似して何かを空間に刻んでいく。

そう言えば、山びこも天邪鬼の一種なんだっけ。

「うわ！ まじか！」

天邪鬼の行動に、ヤナギさんは驚いて手を止めた。

そんなにまずい術を発動する気なのか？

ならば――

俺の決断は早かった。

左手の鎖を、有りつ丈の力で飛ばす。

鎖の伸びは留まることを知らず、元の十倍ほどの長さになっても、まだ天邪鬼へ伸びていく。

俺はいわゆる詠唱妨害を試みたのだ。

今まさに術を発動しようとしていた天邪鬼に、鎖は絡みつき、縛り上げた。

魔法陣は蜘蛛の子を散らしたように砕けた。

「ナイス！ キキ！」

儀式を終えたヤナギさんが、力を解き放つ。

突如天邪鬼を紫色の箱が覆い――それは一気に圧縮された。

時間にして三秒ほどか。

呆氣にとられて。

呆気なかった。

間をおいて、仕事を失った俺の鎖が、水しぶきを上げながら地に落ちていった。

「終了っ。緊張感のない戦闘描写ご苦労さま」

「なな、何のことですかね？」

それより、そんな技があるなら早く使えばよかったんじゃないですか」

「いやあ、試したかったんだよね。天邪鬼って本来、人の心を読んで反対の悪戯をする、っていう下級のオニなんだ――んで、その戦闘力が高いバージョンが、こいつ」

こいつ、とはヤナギさんが手の中で転がしている、紫の立方体を指す。

正しくは、その箱の中の天邪鬼のこと――だが。

「……正直もつとやれると思ったんだけどねー。ま、単純な肉弾戦じゃ、まだまだアタシもこんなもんなのかな」

だから――試したかった、か。

……この人、俗に言う戦闘厨……じゃない、戦闘狂？

「アタシって結構、コンドームでしょ？」

「バーサークでしょ!？」

何言っちゃってんのこの人！

よそで絶対言わないでくださいね！

「……あの、そろそろ帰りたいです」

色々疲れました。

「まだいいじゃんか。もつと話そうよ。」

つかヤナギさん、とか敬語とかしなくていいよ。見た感じ、年も近そうだし。――ま、見た感じが近いだけ、だけどね」

「じゃあ、うん。よろしく……ヤナギさん」

「さん付けは止めないんだね。」

とりあえず葬土を出ようか」

ヤナギさんは歩き出す。

「キキってヒトだろ？」

……そうなんだね。ああ、別に捕まえたりしないよ」



その言葉に、何より安堵する。

「……ヒトとオニの区別って、簡単にできるの？」

少なくとも、俺はできそうにない。

いろりを見たときだって、クリーム色（普通はブロンドって言うのかな）の髪と、微かな、本当に微々たる違和感があったただけだし。

ヤナギさんの答えは、俺の予想と異なった。

「オニ、か。オニって呼ぶんだね。いいけどさ。」

見分けられるかって？　……できないよ。

そもそも、ヒトと……あー、オニの違いなんて、体があるかないか程度のもんだし。カタツムリかナメクジか、目糞鼻糞、だよ」

表現がどんどん下品になっていく……。

「んで、アタシがキキをヒトだと思った理由は……アタシって結構地位が高いんだよ。有名なんだよ」

「……？　ああ、つまりヤナギ『さん』って呼び方は失礼だったのか」

さん付けじゃ、足りなかったわけだ。

サラクさんへのあの態度も、単に礼儀知らずなわけではなく……サラクさんが目上の者ではなかったただけだ。

おそらく対等だったのだ。

「じゃあ、なおさら敬語じゃなきゃ駄目じゃん……」

「いって。最近じゃ、みんな恭しくて肩が凝るんだよね。」

だからといって無礼なら、勿論ぶっ飛ばすけどね」

理不尽だ……。

「ま、ヒトだと思った理由はそれだけじゃないんだけどね。」

そろそろ冥府だけど、永都まででいいんでしょう？」

「うん」

……いろり、怒ってないといいけど。

## 第二話（後書き）

長旅お疲れ様でした。

次話は11月9日投稿予定です。

### 第三話

「キキ殿！ 心配しましたよ！ どこに行ってたのですか？」

「ああ、ちよつとね」

ヤナギさんと永都の冥府で別れ（ややこしい部分があるかもしれないので注釈を添えさせてもらうと、冥府とは各地に複数存在する機関で、この世界と人間界の行き来以外に、冥府から別の冥府へ移動もできるのだ。ようするにレポート）、俺はいろいろと合流した。

「では、帰りましょうか」

案外このまま、この世界で暮らすことになっても不思議はないと危惧していたが、あっさり帰れるようだ。

まあ、戻ったところで、このアウェー感に変化はないんだろうが。

「どこ行くの？ 帰らないのか？」

冥府は逆だぞ。

「キキ殿が心配過ぎて迷子センターでアナウンスをしてもらったので、いましたよと報告を」

「本当にあつたのか、迷子センター……」

\* \* \* \* \*

疲れた。

意識が混濁して、足取りも泥沼の中を進んでいるように、重い。

いろいろいわく、ヒトがあの世界から受ける影響は大きいのです。

何せ、精神世界ですから――何のこっちゃ。

辺りはすでに暗い。田舎なもので、ろくに街灯もない。

目指すは例のアパート。

名前は……なんだっけ？

そんな感じで、それでもなんとか帰還す――

\* \* \* \* \*

あれ、ここは――ああ、そうか。

ひよつとすると、昨日のてんやわんやは夢オチではないかという  
淡い期待を胸に、洗面所へ向かうと、

「おはようございます。キキ殿」

鏡を見るまでもなく、ポニーテール少女の存在で、俺は肩を落とした。

「夢じゃなかった……」

まあ、ここにいる時点で、わかりそうなものだが。

「の……人の顔を見て落胆するとは、ずいぶんな挨拶ですね」

頬を膨らませている少女に謝罪と挨拶を済ませ、俺は訊いてみた。

「昨日、俺はちゃんと帰って来られたのか」

「ちゃんと、とは言い難いですね。玄関で倒れてしまわれたので」

あー、寝オチか。

「どつりで記憶が曖昧なわけだ。いろりじゃないと思うけど、運んでくれてありがとう」

とりあえずシャワーでも浴びたいなんて思ったのだが、第一この部屋にシャワーがあるのか不安だ。

探検してみよう、と意気込んでみたものの、ものの数十秒で幕を閉じた。理由は簡単。狭いからだ。

部屋は六畳の、ここのみ。窓もひとつ。キッチンがあった。洋式のトイレもあった。シャワーまであった！

しばらくここに住む羽目になるだろうと覚悟していたが、案外悪くない気もしてきた。住めば都、は大袈裟か。

一旦いろいろには席を外してもらって、シャワーを堪能する。

ご丁寧に着替えまで用意してあったが、誰の趣味なのだろうか。

いや、ファッションに無知で無頓着の俺に付けられるケチなんぞないが、これは今の俺に悪い意味で似合い過ぎている……。俺だったら、この人と絶対目を合わせないだろうなあ、という意味でだ。目が合ったら何をされるか、わかったもんじゃない。

最悪、殺されるかもしれない。

……そんな笑えない冗談はさておいて。

何をしようか。まずは螢火<sup>ほたるび</sup>さんに挨拶して来るとして、それからだ。

勉強でもするか。いろいろと遊ぶか。ただ、できることなら何か螢火さんの手伝いがしたい。

それと、多少は例の世界が気になったりする――気になるだけだ。あまり関わるべきではないのだろう。なら、わざわざ自分から首を突っ込んでやる必要もない。

現時刻を確認するため、久しぶりに携帯を開いた。

七月三十一日。木曜日。午前九時二十二分。

新着メールが一件。新着といっても来たのは一昨日、二十九日の午後六時頃だった。

妹 - - 陽奈<sup>ひな</sup>からだ。

件名は『証拠写真』で、『ほら、黒いでしょ』という本文とともに、俺の写真が添付されていた。

どうだ、わけがわからないだろう。

俺もわからない。

黒いでしょ - - 確かに、髪は黒いし現在ほど長くない。勿論、目も黒い。

「どうやら、帰りの遅い兄を心配してのメールだったらしい」の一文で流すつもりだったのが、なんだこれは。暗号か？ ダイニングメッセージなのか！？ ……だが残念、死んだのは兄の方だ（泣）。

そうこうしている内に、充電が残りひとつになってしまった。

やることは決まった。

充電器を買いに行こう。

\* \* \* \* \*

「やあやあ、おはよう。目が覚めたんだね。ん？ どうしたんだい？ まるで初対面の人に突然話しかけられたみたいな顔して - - ああ、ごめんごめん。きみと僕は、今初めて会った - - 」



俺は『二〇三』と書かれた扉、つまりはこの部屋の玄関を全力で閉めた。

それはもう、このアパートの寿命を幾年か縮めてしまったと言っても過言ではないほどに。住民の皆さん、ごめんなさい。

部屋の前に怪しい男がいる……。

曇って見えにくいドアスコープを覗くと……やっぱりいる。

……まずは誤解を解こう。

「あの、すみません。部屋間違えてませんか？」

「ん？ きみは林陽生くんじゃないのかい？ - - 何で知っているんだって顔だね。」

僕は白鳥。ここ、『淵森荘』の管理人やってます。きみのことは蛍火ちゃんから聞いてるよ。

昨日はごめんよ、挨拶できなくて。ちょっとばかり急用があつてさ」

『管理人』『蛍火さんの知り合い』のワードに、俺は少し警戒を緩める。

「こちらこそすみません。話されてた最中に、ドア閉めちゃって」

「いって。よくあることさ」

「よくないですよ」

「おお？ 頻度の『よく』と善悪の『よく』を掛けたんだね？ は  
っは。上手いねえ」

「いえ、そんなつもりは」

……誰か助けて！ いろりい！ いろりちゃん！

申し訳なさやその他諸々の感情によって、目が合わせられない。

というか、合わせる目が見当たらなかった。

それは、白鳥さんの黒髪が、顔の八割を覆っているせいである。

ちなみに年齢は二十代後半くらいが妥当か。

「……大変だったね」

「はい？」

優しい口調だった。

「蛍火ちゃんの話じゃ、確か青い大きなオニにやられたんだっけ」

「……何の話ですか？」

「誤魔化さなくていいよ。きみのことなら蛍火ちゃんに聞いたって  
言っただろう。……そういえば、オニは誤魔と呼ばれることもある

んだっけ」

……この人何者？

「そんな大した者じゃないよ。友人が向こう側に住んでるっただけで」

「……サラクさん、ですか」

「そうそう」

オニって意外と友好関係あるんだな……俺、やられる必要なかったんじゃないか？

「誤魔化してるわけじゃないですけど……青い、オニ？

……あ、僕はそれに」

殺されたのか。

そう言われると、そんな気がしなくもない。

「覚えてないのかい？……でも案外、そっちの方がよかったかもしれないね……自分の死ぬ瞬間なんて、記憶してない方が、さ」

「そうですね。運が……僕は運が、よかったのかもしれないです」

「運が？」

白鳥さんの唯一の見える肌……口元が心底嬉しそうに笑った。

「運が、ね。」

ああ。運がよかったねえ。きっとそうだよ。いつだって、そう思うべきだよな」

……随分もったいぶった言い方が好きな人らしい。

「ところで、陽生くんは昔はどんな陽生くんだったの？」

「どんな、って……あ、写真ありますよ」

ちょうど陽奈から送られてきたアレが。

それに俺は、このメールの意図にも気付いた。

「いい笑顔だ。でも、こんな写真がポンと出てくるってことは、陽生くんは意外とナルシスト？」

「違いますよ。妹が『カラコンしてるの？ 目の色が変わだよ』って言うんで、じゃあ証拠はと訊いたら、これを送ってきたんです」

奇しくも遺影のようになってしまったが。ホント、イエイ とかしてる写真じゃなくてよかった。

まあ、俺のそんなテンションの写真は、この世に一枚たりとも存在しないだろうが。

「妹さん、元気かい？」

「え、ええ。恐らく」

「……今頃心配してるだろうね」

「どうですかね」

心配してるかなあ……してるんだろうなあ。

「けど案ずることないよ……きみは友達の家泊まってることになってるから。体も、しっかり保管してある……らしいよ」

「ははっ」

笑ってしまった。

「何だい？」

「僕、家に泊めてくれるような友達いませんので、嘘ついちゃったなあと思って」

思って、自嘲的に……笑ってしまった。

「嘘じゃないだろう。きみは今、現に僕の家泊まってるじゃないか」

白鳥さんは、本気とも冗談とも、慰めとも付かない、そんなことを言った。

「……おっと。僕はきみを朝食に誘おうと思って来たんだった」

そういえば、しばらく何も食べていなかった。確か、最後に食べたのは……一昨日の昼？

断るわけがなかった。

\* \* \* \* \*

俺は激しく咳き込んでいた。

さっき食べた物とか、肺とかが飛び出しても、おかしくなくらいに。

「キキ殿！」

毎度いろりには心配をかけてしまう。

この子はこの子で、毎回しっかりと焦ってくれる。……いや、迷惑をかけているのは百も承知だが、それにしても赤の他人が――昨日今日知り合ったばかりの関係なのに、こうして心配してくれるのは、どこかモヤモヤした気持ちになる。

「……何をニヤニヤしてるのですか。その調子じゃ大丈夫そうですね」

「ああ。急に食べ過ぎて、体がびっくりしたのかもね」

そう、食べ過ぎた……。

一〇一号室に招かれた俺は、テーブルに並ぶ数々の皿を前に、立ちすくんでいた。

「あら。おはよう」

「おはようございます」

声をかけてくれた蛍火さんは、使った調理器具を洗っていた。

「朝から豪勢ですね」

まさしく『招待された』って感じた。

「やっぱり、作り過ぎちゃったかな」

「……何で白鳥さんが答えるんです？」

しかも、彼氏に初めて手料理を振るった女の子みたいなノリで。

「何が？ - - あ、蛍火ちゃん。わざわざありがとう。でもそれも僕の仕事だから - - さ、食べて食べて」

洗い物の手を止め、蛍火さんも席に着いた。

……。マジか！

コレ白鳥さん作か！

これは金を払った方がいいんじゃないか？ そう思わせるほどの出来だった。新手の詐欺だ。美味しい美味しい詐欺。

まあ、純粹に凄いと思ったし、美味しいとも思っ<sup>て</sup>平らげましたけども。

「ごちそうさまでした。」

「いやあ、まさか全部食べてくれるとは。作<sup>っ</sup>た甲斐があ<sup>っ</sup>たよ」

と、白鳥さんは満足そうに笑い、後片付けを始めた。

「・・・螢火さん。それで僕に、何か手伝えることは……」

手伝いといえば、白鳥さんに食器洗いを申し出たところ、

「ここまでが僕の仕事……というか、趣味なんだよね。ありがとう。気持ちだけ貰<sup>っ</sup>ておくよ」

どうやら料金は取らないみたいだ。よかった（そりゃそうだ）。

話を戻そう。

「手伝<sup>っ</sup>つて言われても……ないわよ。だって、私がやること自体がないもの」

「そうなんですか？」

「別に私は霊媒師とかじゃないし、夜な夜な異能バトルにいそしめるわけでもないし。歌手目指してもないし」

「陰ながら応援します」



「だから目指してないわよ。」

それに、あなたの体ことも桃子におまかせ！　とは言っただけだ。」

「それこそ言っていないです」

何故か小ボケを挟んでくるなあ。この人、どこまで本気なんだか。

「……言っていないけれど、そう言っただけで、実のところ私ができることなんて、一つもないのよ。あなたの体の、回復を待つだけ」

「回復を、待つだけ……」

つまり、しばらくはこの生活が続く。

「……陽生くん。暇なら、ちょっと頼まれちゃってくれないかな？」

テーブルを拭きながら、白鳥さんが言った。

「僕でよければ。何ですか？」

「今日の朝ご飯で冷蔵庫の中身フルに使っちゃったから、スーパーに行って欲しいんだけど」

「そんなに張り切ったんですか……」

この人はこの人で、そこまで本気じゃなくてもいいだろうに。

「可愛いだろ？」

まあ、どう見てもオッサンなんですけどね。

「陽生くん。突っ込みは言葉にしなさ……陽生くん。想いは言葉にしなきゃ、伝わらないんだよ」

それは言い直し詐欺だ……。

「最近、生き生きしてるわね」

蛍火さんが言う。俺にはない。

「そうかい？ まあ冴えない独り身の男に客人が来てくれて舞い上がる気持ち、つてのを察してくれよ」

「白鳥さん独身なんですか？」

「そつだよお。同情するなら嫁をくれっ」

「切実ですね……」

「あ、陽生くんって妹いたじゃん」

「……いますけど。いますけど、それがどうかしましたか。白鳥さん」

「ごめんなさい……ほんの出来心です。ですからどうか、そんな目で見ないでください」

「あ、すみません」

無意識で目つきが悪くなっていたようだ。気をつけなければ――小四のとき、母親から人殺しの目をしていると注意された伝説を持つ、『曰く付きの目』である。

「それにしても、生まれ変わるなら、もっと優しい目の人になりたかったな」

「――あなたのそれは、その体の目なんかじゃないわよ」

俺の何気ない呟きを、螢火さんは否定した――若干、語気を強めて。

「そうなんですか。じゃあ俺の――」

「陽生くん。これだけ買ってきて」

会話を遮るようにして、白鳥さんからメモとお金を渡された。

……さっさと行けってことが。

「じゃあ、いってきます」

……そんなこんなで、俺達は指定されたスーパーへ向かっているところだった。回想がくだらな過ぎて忘れるところだった。危ない危ない。

ちなみに、今は電源を切つてある携帯を耳に当てているため、外からは普通に通話中に見えるだけ……痛い人対策はバッチリだ。

「さすがキキ殿。回想が長い、と海藻が長い、を掛けてるんですね。はっは。上手いですねえ」

「どこで白鳥さんのやり取りを聞いていたかは知らないけど……てか、何がどう掛かってるの!? 一度でも海藻の話をしたか!？」

「さっきワカメの味噌汁美味しかったなあ、って」

「言ったけど、今関係なくないか……」

朝ご飯の場に呼ばれなかったのがショックなのだろうか。

何で来なかったのか訊いたら「ちょっと外に出てと言ったのは、キキ殿じゃないですか!」と怒られたので、まあ、責任は俺にあると言っている。

どっちにせよ、ヒトが食糧とする物を、オニは食べないらしいが。

「じゃあ、普段何食べてるの?」

「こっちで言う、野菜みたいな物を育てて食べているのです」

「何か好物とかあるの?」

「魚肉ソーセージです」

「話にならねえ……」

「それでも笑いませんか……」

「笑わせたかったの？」

なんか、悪いことしちゃったなあ。

「こう見えてもいろり、北風のいろりと呼ばれて久しいのです」

それ、駄目な方だからな。

「まあでも、キキ殿ほど笑顔の似合わない男はいませんから、笑わない方がいいです」

「放つといってくれ」

自覚してるわ。

「まあまあキキ殿。素顔が似合わないよりはマシですよ」

「そんな奴いるかつ」

素顔って……そのままじゃないか。

「あー……今まで人前ではニコニコしてようと心がけてきたけど、それは逆効果だったわけか」

「キキ殿……」

いろりが気まずそうに視線を逸らして、

「ニコ動は……」

「その返しはどうなの？ オニとして」

俗世間に浸りすぎだよ……。

「いろりが馬鹿だつてことも十分わかったし、そろそろ店に着こうか」

尺的にも限界だし。

「ば、馬鹿とは失敬な！ いろりはただ、この小説の『ムードファクトリー』になりたいだけなのです！」

「ファクトリー！？ 大きく出たなあ」

「それに、馬鹿って言った人が馬鹿なのです。やーい、バーカ！ バーカ！」

「いろりの方が言ってるじゃん」

「のっ！ 誘導尋問とは卑怯な！ キキ殿のダテン師！」

「いや、それを言うなら……え？ 堕天使？ ペテン師？ わかりづらいボケは……」

「螢火？」

「……はい？」

耳から、暗黒画面の携帯を離す。

いろりの声ではない。

自転車に乗った、部活帰り風の女子高生が、そこにはいた。

目が――合う。

「……蛍火。ねえ、蛍火――だよね？」

### 第三話（後書き）

話が進まない……。

なんとか投稿できました。

次の投稿は19日を予定してます。

感想、誤字脱字の指摘、待ってます。

ありがとうございました。



## 第四話

その視線は、はつきりと俺を捉えている。

「は……はい」

そう答えてみたはいいが、生憎俺はこの人を知らない。

すると少女は、そんな俺の様子を察したようで、

「うち、水谷<sup>みすたに</sup>だけど、覚えてない？ 去年、転校した……」

言葉が徐々に、小さくなっていく……。

そして、探るような目つき。

「きみ……匠<sup>なるみ</sup>克<sup>く</sup>じゃないの？」

「ナルミ？ いいえ……」

「……だよね。」

すみません。人違いでした。あんまりに知り合いに似てたから

打って変わって、丁寧な所作。

水谷さんがおじぎをすると、ふわりとおさげが揺れた。

「いいですよ。よくあることです」

「いえいえ……じゃあ、失礼しました」

言って、水谷さんは自転車を漕ぎ出していった。

「……なあ。俺、ちゃんと話せてたかな？」

彼女の背中を見送りながら――見えなくなったところで、俺は訊いた。

「の？ ええ、差し支えなく、こなしていましたよ？」

いろりは、それが何か？ という顔をしている。

「そつか。……ああ。いや、人と会話するの、苦手なんだよ」

「そうなのですか？ そんな様子、微塵も感じませんでしたよ」

「そう見えないよう、精一杯やってるつもりだよ。これで一杯一杯だ」

人と話すのは嫌いではない。あくまで、苦手なだけ。ノウハウがわからないだけ、だ。

こんなでも、とりあえず相手に不快感を与えない程度の受け答えができるまでに、進歩というか挽回というか、したつもりだが。

「人付き合いが不得意ですか……確かに携帯のアドレス帳の中は、泳げそうなくらい広かったです」

「か、勝手に覗くなっ」

泳げそうなくらいって……大きい風呂見た感想みたいなこと言いやがって。

「申し訳ありません。覗いていいのはお風呂だけでした」

「今のうちに自首してくれ」

てか、いろりはステルス性能あるから、それを利用して、色んな悪事が可能じゃないか？……まあ、ちょっと頭が残念なこの子に、一体何ができるといいのか。

「『キキ殿！ メールを一件受信したのです！』」

「おおっ、そんなことができるのか」

「『キキ殿！ 朝なのです！ もうっ！ 起きてくださいよ！』」

「すげえ！ 他にはどんな機能があるんだ？」

「電話とかですかね。ちなみにダウンロードは一つ百円です」

「現金な奴だ……まあ、しょうがないな。アラームのを買うよ」

「ちよっ、買うのですか！……まったく、自分で言うておいてアレですが、妥協しないでくださいよ。お代も結構です。」

キキ殿はヒト付き合いが苦手でも、オニ付き合いは苦手としないのですね」

「いろりが特別話を合わせてくれるから、やりやすいだけだよ。」

ところで、オニって呼び方、実はあまりよくなかったりするの？」

「そんなことないと思いますよ。そもそも、いろり達自身を表す単語がないので、どう呼ばれても文句は言えませんよ。」

キキ殿だつて、差別的な意味を孕ませて言っているわけではないのでしょ？」

「まあ、そうだけど……」

その後も駄弁を弄しながら、白鳥さんのメモを頼りに店に着き、メモを頼りに買い物を終え、帰路の途中でお目当ての携帯充電器を購入し、現時刻は正午――炎天下の中、ひいひい言いながらの道中である。

「また何やら、考え込んでいらっやいますね」

その通りだった。俺の頭は、さっき会った『彼女』のことで一杯だった。

「『恋ですか、それとも鯛ですか？』って言わなくていいよ。違うから」

「のっ……では、いろりから言えることは最早何もありません。頑張ってください」

「お前はボケしか言えないのか!？」

勘弁してくれ……。もしかしてコミュニケーション能力という点のみで見れば、いろり、俺より駄目なんじゃないかなろうか。

「狭い町なので、散歩でもしてたら再び会えるのではないですか？  
……次に相見えるときは、お互い敵同士でしょうがね」

シリアスっぽい……遠くを見つめる感じが、いかにもソレっぽい。

「――水谷さん、だっけ？　が、人違いでしたって謝ってたじゃん。でもさ――もしかしたら人違いだったのって、俺の方じゃないか？」

萤火、匠克。

ホタルビ、ナルミ。

萤火さんがアルケミストでもネクロマンサーでもないなら、この体をどうやって調達してきたのか――そういうことだったのか。

この体の宿主とでも言うのか――は、萤火さんの弟とか、それに近い者だろう。

俺は間借り者の、紛い物だったらしい。

そして、それはまた一つの疑問を生む。

一難去って、また一難。

まだまだ、前途は多難。

本題 - 匠克本人は、どこにいるんだ？

「なあ、いろり」

「……………」

「いろり？ 聞いて - -」

「キキ殿」

いろりは歩みを止め、振り返った俺をじつと見つめる。

表情が堅い。そして覚悟も堅いのだろう - - いろりは口を開いた。

「いろりが匠克殿と初めて出逢ったのは、つい一年前です。当時、匠克殿は高校一年生でしたね」

高校生になりたての頃。五月あたりだった気がします - - ということは、俺と同じ年らしい。

その経緯は訊かなかった。いろりも言わなかったし、別にそこまでの興味も湧かない。

いろりは駆け足で俺を追い抜き、歩きながら話し続ける。

「いろり達は友達になった。桃子殿とも、匠克殿を通じて知り合いました。勿論、二人は姉弟です。」

そして、匠克殿が『向こう側』に惹かれていくのに、時間はかからなかったのです」

文字通りの意味で、入り浸ったという。

弟さんのように、偶然オニの存在を知った人間を裁く法は、向こうにはないらしい。

向こうに迷い込んだ人間にも同様で、追い出されたりもしない - それは単に、ヒトが来たことを観測できないかららしいが。

とにかく、螢火弟さんはオニを知り - 理解した。

「ネトゲをやり込む感覚でしょうかね。匠克殿は気が付けば、かなりの地位に立っていました。糾府<sup>きゅうふ</sup>を任されるほどでした」

『府』のトップ - それはもしかしたら、サラクさん、ヤナギさんと肩を並べるレベルかもしれない。

それは異例の出世と言えよう - 異例の世に出る。

いや、異世界人がただか数ヶ月でそこまでの業績を上げるとなると、最早、異常な出世だ。単純な話、ぽつと出の野良犬が、どこぞの馬の骨が、社長をしているような - そんな感覚だろう。

「ヒトは、あちらの世界で影響を受ける - よくも悪くも、です」

精神世界、って奴か。

「匠克殿は、優しい人でした。しかし - 変わってしまった。染ま

ってしまったのです」

闇に浸かれば黒くなるのです――と、いろりは続けた。

前を歩く少女の、その表情は見えない。

デフォルトが、逆三角に口を開きつばなしの言ってしまうえば馬鹿面ないろりが、どんな顔で、どんな思いで語っているのか――想像したくもない。

「匠克殿は、オニを、生態系の頂点に立たせようとしているのです――ヒトを、滅ぼそうとしているのです」

「そんなことって……」

「できます」

いろりは断言した。

「……まあ、できるんだろうな。昨日実際に行ってみて、よくわかったつもりだよ。」

でも、じゃあ、何で今まで誰もやろうとしなかったんだ？」

「いろり達はヒトの感情から生まれるのですよ。ヒトがあつてこそオニです。」

ヒトの心は、言葉は、意思是、大きなエネルギーなのです。それをヒトが使わないから、オニが有効に使わせてもらっているのです。



それに、あちらの世界は平和で上手く回っているので、そもそも人間界に手を出す必要がないのです」

「なるほど。ヒトを失うわけにもいかないってことか。弟さんは、それを知った上でやってるの？」

「どうでしょう。悪に取り込まれ、悪意を吸収してしまったので…ただ破壊が全てなのだと思います」

成れの果て、負の感情そのものに――成り果てた。

「じゃあ、いろいろの『螢火さんの手伝い』って……」

いろいろは俺に最後まで言わせず、

「……です」

そう言って、いろいろはようやく振り返った。

「キキ殿。いろいろからも一つ、頼まれてくれますか？」

言おうとしていることはわかる。でも、

「俺に止められるほど、簡単な話じゃないだろ。その計画とやらの賛成にしろ、反対にしろ、他のオニ達だって動いてるんだろっ？」

「――みんなは、匠克殿を殺そうとしているのです」

「……。で、そうなる前に弟さんを助け出せ――と」

……難易度高えって。

「キキ殿。……桃子殿を、世界を、いろりを助けてください」

蛍火さんは、何も手伝うことなんか、ないって。

あれは嘘だったのか。

蛍火桃子。

俺は彼女の、多くを知らない。眠そうで、だるそうな美人。

俺の――命の恩人。

「……ああ、夏休みの宿題が一つ増えたな」

「の？」

スーパーの袋を持っていない左手で、いろりの頭を撫でる。

「まあ、前向きに検討してみるよ」

\* \* \* \* \*

「水谷さん……？」

淵森荘に着いた俺は、白鳥さんの料理を味わった後、白鳥さんの畑仕事を手伝ったりして暇を潰していた。

それも一通り終わり、淵森荘に戻ろうとしたときだった。

水谷さんと会った。

早い再会だった。

「おやおや？ 陽生<sup>あきお</sup>くん、水谷ちゃんと知り合いなのかい？」

手が早いねえ、と付け足す白鳥さんの顔は、鬱陶しいくらい、にやついている。

「陽生っていうんだ？」

水谷さんが午前中での気まずさからか、おずおずと話しかけてきた。

「そうそう。林陽生っていうんだ。高校二年だから、水谷ちゃんと一緒だよ。キキって呼んでよ」

好感の持てる自己紹介……いやいや、

「なんで白鳥さんが僕の紹介してるんですか。そもそも、どうして水谷さんと知り合いなんですか」

「そりゃあ、水谷ちゃんはウチの子だから」

「え」

子供いたの？

「そろそろ引越すけどね」

答えたのは水谷さんだ。

……あ、ああ。淵森の住人か。そっちの意味か。

「陽生くん天然な……な、なんでもないよ。だからこっち見ないで」

見ただけじゃなか……。

「あれ？ 大家さん、白鳥っていつの？」

「きみは失礼だな水谷ちゃん。もう、かれこれ一年以上住んでるだろうに」

「はいはいお世話になりましたー」

「ええっここでお別れなのかい!？」

白鳥さん不憫過ぎる……頑張れっ。

「あ、えーっと……キキ？ だよね。さっきはホントごめん」

「だから気にしないでって」

「うわあ紳士だ……タメだし、敬語とかいらないよね？ ウチは水谷夏希<sup>なつき</sup>。」

部屋は一〇五号室だよ」

\* \* \* \* \*

場所は変わって、白鳥さん宅。

「いやいや、絶対ピーラーだって。キキは味わったことないから言えるんだよ」

いやあ、なんというか。

「まあ、水谷さんは体験談だしね。でもおろし器は、おろすんだよ？ ヒット数が違うよ」

すっかり打ち解けてしまった。

特別、趣味が合ったりもしなかったし、あらゆる意味で毛色の違う俺達だったが、この人の話しやすさに救われていた。

まず女子高生特有の、棘のような一面があまり見えない（失礼）。

……まあ、見せないだけ、だろうけど。それでもいい。

元気で、さらに自覚はないらしいが、どこかゆったりとした雰囲気がある - 第一印象、そんな子だった。

同じ屋根の下で生活するため、また会うことがあるだろうから、まあ、仲良くできるに越したことはない。

そして意外にも俺は一期一会の場を大切にするのか、と我ながら驚いた。

ちなみに今の議論は『おろし器とピーラーはどちらが痛いか』という不毛な争いである。

「そういえば、キキは高校どこにするの？」

「いや、ここに引っ越してきたわけじゃないからさ。ただの……観光？ だから」

……でも、この事態が長引けば、それもあるかもしれないな。

……若干期待している自分がいる。

「引っ越してきたわけじゃないって、ここアパートだよ？ ……はっ、まさか大家さん、そこまでお金に困ってたのか」

「……水谷ちゃん。怒るよ？」

しつこいようだが、ここは白鳥さんの一〇一号室。

スイカを切り分けながら、白鳥さんは言った。

「いいかい水谷ちゃん。陽生くんとは昔馴染みってやつでね。決して僕は彼からお金を貰っていないし、第一に……」

人差し指を立て、よくある（？）お説教のポーズをする白鳥さん。

「……いや、危ないんで包丁置いてくださいっ」

「ごめんごめん。とにかく、僕は失脚負けなんてしてない」

「でも、ここに住んでるのってウチの家族と、キキと、新井さんくらいじゃん」

うつわぁ……水谷さん、えげつない。

「そつ……そうだけど、ほら、副業とかあるし」

「畑でしょ？ あれえ？ でも大家さん一人だから、独りだから、そんなにお金必要ないよねー」

「えっ、そうだよ！ そうですけど何か！」

「開き直っちゃったよ……あと水谷さん、その辺にしておいてあげて」

ある意味、壮絶なオヤジ狩りだ。

可哀想に、きっと前髪の下の瞳はウルウルしているのだろう……。

「他にも副業してるし……聞いてよ陽生くん。エロゲの主人公の大半は、実は僕なんだよ」

「知らないですよ……てか嘘ですね」

時間を忘れて三人は話し込んでいたため、いつの間にか窓の外が暗くなり、その流れで俺達は白鳥さんに夕飯をご馳走になった。

「あら、私は呼んでくれないのね」

その声は、明らかに寝起きな蛍火さんだった。

「ちょうど今できて、呼びに行こうと思ったところだよ。――ああ、そっだ。この子は水谷ちゃん。一〇五号室の子だよ」

「私は蛍火桃子。よろしくねー」

「！」

隣で水谷さんの顔が強張った気がした。

蛍火さんの適当な挨拶に驚いた――わけではない。彼女を知っているのだ。

もつとも、知り合いではなく、匠克の姉として――知っているのだろう。

水谷さんは動揺している。無理もない。

おそらく、後で蛍火さんに『キキは記憶喪失なの？』等々の探りを入れるだろうが、それは仕方がない。蛍火さんも、いつものように適当に流すだけだろう。

そんなこと露も知らないといった風で、表面上は楽しく、俺は食事続けた。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*



「キキ殿。行きましょう」

「・・・向こうに、か」

食後、部屋に戻ると少女が待っていた。

「弟さんを助けに行くの？」

「いいえ。まだ、そのときではないのです。」

ただ、向こうに慣れておくためにも行くべきです」

慣れたくないけどなあ。

「それにキキ殿。サラク様がお呼びです」

#### 第四話（後書き）

この話は何を目指しているのか…。

第四話でした。

相変わらずのスローペースで、次話は11月29日の更新を予定しております。

お気に入り登録していただけると嬉しいです。

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0199y/>

---

哀闇アーマー

2011年11月20日07時09分発行